

{-e-}型自動詞と、対応する{-u}型他動詞の 派生関係について

—『日本国語大辞典精選版』における初出年代から
比較した有対自動詞の性質—

関 口 雄 基

キーワード：自他対応、{-e-}型自動詞、派生関係、外力の必要性、内力、反使役化

1. はじめに

自動詞と他動詞の対応に関する問題は、形態論や統語論・音韻論等、広く言語学の分野において議論の対象となっており、これまでに多くの研究が蓄積されてきた。日本語における自動詞と他動詞は、英語等の言語におけるそれらとは異なり、統語的のみならず、接辞によって形態的に区分されることが知られている。(1)は、西尾(1954)による日本語の自他対の形態的な分類である¹。

(1) 西尾による接尾辞の整理(西尾1954: 109-110)

自動詞 — 他動詞

- a. 1. 〈-eru〉(下一) — 〈-u〉(四):
抜ける／抜く, 砕ける／砕く, 脱げる／脱ぐ, 扶れる／扶る,
- b. 2. 〈-u〉(四) — 〈-eru〉(下一):
附く／附ける, 向く／向ける, 立つ／立てる, 整う／整える,
- c. 3. 〈-aru〉(ラ, 四) — 〈-u〉(四):
塞がる／塞ぐ, つながる／つなぐ, 刺さる／刺す, 包まる／包む,
- d. 4. 〈-aru〉(ラ, 四) — 〈-eru〉(下一):
掛かる／掛ける, 曲がる／曲げる, 当たる／当てる,
- e. 5. 〈-u〉(四) — 〈-asu〉(サ, 四) / 5' 〈-u〉(四) — 〈-aseru〉(サ, 下一):
驚く／驚かす, 乾く／乾かす, 動く／動かす, 合う／合わせる
- f. 6. 〈-ru〉(ラ, 四) — 〈-su〉(サ, 四) / 6' 〈-ru〉(ラ, 四) — 〈-seru〉(サ, 下一):
悟る／悟す, 残る／残す, 濁る／濁す, 乗(載)る／乗(載)せる, 寄る／寄せる
- g. 7. 〈-eru〉(下一) — 〈-asu〉(サ, 四) / 7' 〈-eru〉(ラ, 下一) — 〈-yasu〉(サ, 四):
更ける／更かす, 逃げる／逃がす, 馴れる／馴らす, 費える／費やす, 生える／生やす
- h. 8. 〈-reru〉(ラ, 下一) — 〈-su〉(サ, 四)
現れる／現す, 流れる／流す, 乱れる／乱す, 潰れる／潰す

日本語の自他対に関するこれまでの研究は基本的に、ある一定時期における動詞の意味や出現頻度を基にした共時的な視点から、自他対の派生関係について考察がなされてきたものが多い（奥津1967、影山1996、ナロック2007a等）。これは、自他対の派生という現象を横の軸から捉え、形態的な分析を行うというものである。一方で、派生という現象には、どちらの形式が先に誕生し、もう一方の形式がどれほど遅れて誕生したのか、また、どのような特徴を持った形式が遅れて派生しやすいのかという、歴史的側面、つまり縦の軸が大きく関係していると考えられる。しかしながら、現代語に見られる自他対をこのように縦の軸から捉え体系的な観察を行った研究は、これまであまりなされてこなかった。

こうした中、自他対を派生形式として捉え、歴史的な観点を含めながら包括的な分析を行った研究としてナロック（2007b）を挙げることが出来る。

ナロック（2007b）は、「ある語彙項目が別の語彙項目から派生した場合、2つの語彙項目の間に歴史的な関係（先に出現した語彙項目と後にそこから派生した語彙項目）があり、形態・音韻的要素の付加・差し引きなどによる形態的な派生関係も生じ、そして、そこに歴史的・形態的な派生を動機付ける意味関係や統語的な側面もある。」（ナロック2007b：165-166）と述べ、通時的な日本語の自他対のリストを元に、『日本国語大辞典 第二版』の初出年代から日本語が、自動詞から他動詞を導く類型を持った「他動化言語」なのか、他動詞から自動詞を導く「非他動化言語」なのかを分析した。ナロック（2007b）によれば、日本語は基本的に自動詞を基盤とし、他動詞を派生させる他動化言語であるが、時代が下るにしたがって他動化型が減少し、非他動化型や、自動詞と他動詞が同じ形式になる不定型が増加していったという。

ナロック（2007b）は、自他対を派生形式として捉え、歴史的な観点を含めながら包括的な分析を行った数少ない研究と言える。一方で、ナロック（2007b）では、類型論的な立場に立ち、あくまで日本語が他動化言語なのか、非他動化言語なのかを数の面から見ることに主眼を置いているため、どのような特徴を持った動詞が遅れて生まれるのか等、個々の動詞の意味や文法的な部分については立ち入っていない。また、ナロック（2007b）が対象としているのは、主に古典語であり、現代日本語における自他対の文法的な特質と歴史的な派生関係の位置づけについては、考察の対象外となっている。

そこで本研究では、ナロック（2007b）の研究手法を基にしつつ、記述論的な立場から、自他対応における形態の在り方と動詞の文法的な意味との対応関係を重視しながら通時的な派生の在り方を観察する。本稿では、特に〈折る〉*vs.*〈折れる〉や〈抜く〉*vs.*〈抜ける〉のような、{-e}型自動詞と{-u}型他動詞の対、すなわち自動詞形が母音語幹動詞になり、他動詞形が子音語幹動詞になる対（=（1a））に焦点を絞り分析していく。

2. 先行研究：{-e}型動詞の意味的な位置づけ

{-e}型自動詞と{-u}型他動詞の対の派生関係については、青木（1995）（1996）（2001）及び FRELLSVIG/WHITMAN（2016）等によって通時的な立場からの分析が

なされてきた。また、現代語の自他対における {-e-} 型自動詞の意味に着目した研究として、須賀（1980）や影山（1996）を挙げることが出来る。

影山（1996）は、自動詞化の接辞 {-e-} を、使役主を変化の対象と同定化することで他動詞から自動詞を導く接辞と位置づけ、このプロセスを「反使役化」と名付けた。

（２）反使役化の派生メカニズム（影山1996）

- a. *e.g.* 割る {war-u} : x control [(y) become [y be at broken]]
- b. *e.g.* 割れる {war-e-ru} : x=y control [(y) become [y be at broken]]

影山（1996）によれば、接辞 {-e-} を含む自動詞は状態の変化が自らの性質による自然発生的な意味を表すという。つまり、自動詞文が表す事象において使役主は、そもそも存在せず、自然発生的に物事が起こったという解釈が可能になるのである。例えば、（２）に挙げた〈割れる〉という動詞は〈割る〉という対応する子音語幹の他動詞を持つが、「(何かが) 割れる」という事象が成立するために、誰かが「割る」という行為を行うことは必ずしも前提にはならず、自然発生的に「(何かが) 割れる」という事象が成立し得ることになる。影山（1996）では、反使役化によって派生した自動詞は①使役主（動作主）が存在しないことを示唆する副詞「勝手に」と共起しやすいこと、②命令文化しやすいこと、③道具・手段を表す副詞と共起しにくいことが指摘されている。

（３）副詞「勝手に」との共起が可能

- a. 取っ手が勝手に外れた²。 (影山1996 : 189 ; (118a))
- b. 紙が勝手に破れた。 (影山1996 : 189 ; (118b))
- c. ページが勝手にめくれた。 (影山1996 : 189 ; (118c))

（４）命令文化することが可能

- a. ロープよ、切れないでくれ！ (影山1996 : 190 ; (121a))
- b. しみよ、きれいに取れてくれ！ (影山1996 : 190 ; (121b))
- c. ひもよ、ほどけるな！ (影山1996 : 190 ; (121c))

（５）道具・手段を表す副詞と共起しにくい

- a. * ? 左手を使って、ページがめくれた。 (影山1996 : 190 ; (120a))
- b. * ? ドリツ製のはさみで布が丁寧に切れた。 (影山1996 : 190 ; (120b))
- c. * ? ペンチでつかんでねじが外れた。 (影山1996 : 190 ; (120c))

影山（1996）はいわゆる自動詞と他動詞の対応を英語と比較し、日本語における自動詞と他動詞の派生メカニズムと意味の関係を統一的に考察した研究として、その価値は高いものである。しかしながら実際のところ、{-e-} 型自動詞には、事象が成立するのに、使役主（動作主）の存在が想定されるものも含まれており、{-e-} 型自動詞であることが必ずしも反使役的な意味を持つとは限らない。

- (6) a. 野菜が煮える。
b. 品物が売れる。

例えば、(6)に挙げた〈煮える〉や〈売れる〉という {-e-} 型自動詞は、それぞれ〈煮る〉〈売る〉という対応する子音語幹の他動詞を持つが、基本的に「(何かが) 煮える」「(何かが) 売れる」という事象が成立するためには、「(誰かが) (何かを) 煮る」「(誰かが) (何かを) 売る」という行為が必要になると考えられる。つまり、自動詞が {-e-} という接辞を持つことと、自動詞の意味が反使役的になることは必ずしも同値であるとは限らないのである。

以下では、こうした現代語における、{-e-} 型自動詞と対応する {-u-} 型他動詞の対、すなわち母音語幹自動詞と子音語幹他動詞の対 (= (1a)) について、①『日本国語大辞典 精選版』における初出年代を基に、派生パターンを整理するとともに、②動詞が持つ語彙の意味や文法的な特徴について考察を試みる。また、先行研究において指摘される {-e-} 型自動詞の意味的特徴は、他動詞形に比べて自動詞形が遅れて生まれたか否かによって大きく左右されることを主張する。

3. 調査の方法

ナロック *et.al.* (2015)『現代語自他対一覧表 Excel版』に掲載されている自他対の中で、「Ⅱ非他動化対、3.Vc>Vv、4a.V+ (y) e型、4b.Vc>V+ (y) e型」に分類されているものを対象に、『日本国語大辞典 精選版』における初出年代を調査した。このうち、〈断ち切る〉*vs.* 〈断ち切れる〉のような複合動詞の対や初出年代が記載されていない対などを除いた自他対について、「自動詞が遅れて生まれてくるもの」、「初出年代にそれほど差が見られないもの」³、「他動詞が遅れて生まれてくるもの」の3パターン⁴に分け、それぞれの動詞の特徴について考察を試みた⁵。

4節では、それぞれのパターンの {-e-} 型自動詞について詳細に見ていくこととする。

4. 自他対の派生パターンと動詞の類型について

4. 1. 自動詞が遅れて生まれてくる自他対

本節では、「自動詞が遅れて生まれてくる」自他対について分析を行う。

(7)は『日本国語大辞典 精選版』の初出年代を比較した際に、自動詞が約100年以上遅れて生まれてくる自他対である。表の網掛け部は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを表している。これらの動詞対について、現代語における自動詞の意味を筆者の内省に基づき、表の3列目(「分類」欄)のように、大まかに分類した。

(7) 自動詞が遅れて生まれてくる自他对

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
売れる	† 売る	(離)	室町末-近世初『虎明本狂言・河原太郎』	売る	† 売る	810『斯道文庫本願經四分律平安初期点』
千切れる	† 千切る	離/状	1545『謡曲・鉢木』	千切る	† 千切る	974『蜻蛉日記』
くじける	† くじく	状	1073『史記呂后本紀延久五年点』	くじく	† くじく	720『日本書紀』
削れる	† 削る	離/状	1525『古文真宝笑雲抄』	削る	† 削る	8C後『万葉集』
さばける	† さばく	(離)	室町末-近世初『幸若・高館(寛永版)』	さばく	† さばく	1237-45『壬二集』
刷れる	† 刷る	生/状	室町末『御伽草子・猿の草子』	刷る	† 刷る	8C後『万葉集』
そげる	† そぐ	離/状	1586-99『巨海代抄』	そぐ	† そぐ	950『大唐西域記卷十二平安中期点』
吊れる	† 吊る	状	1905-06《夏目漱石》『吾輩は猫である』 ⁶	吊る	† 吊る	9C末-10C初『竹取物語』 ⁷
釣れる	† 釣る	生	1887《文部省》『尋常小学校読本』 ⁸	釣る	† 釣る	8C後『万葉集』 ⁹
取れる	† 取る	離	1530『清原国賢書写本莊子抄』 ¹⁰	取る	† 取る	720『日本書紀』 ¹¹
捕れる	† 捕る	生	1603-04『日葡辞書』 ¹²	捕る	† 捕る	712『古事記』 ¹³
抜ける	† 抜く	離	10C終『枕草子』	抜く	† 抜く	720『日本書紀』
脱げる	† 脱ぐ	離	1688『浮世草子・日本永代蔵』	脱ぐ	† 脱ぐ	10C前『伊勢物語』
練れる	† 練る	生/状	1603-04『日葡辞書』	練る	† 練る	810-24『靈異記』
ねじれる	† ねづ	状	1563『玉塵抄』	ねじる	† ねづ	1120『今昔物語集』 ¹⁴
剥げる	† 剥ぐ	離/状	950『石山寺本法華厳玄賛平安中期点』	剥ぐ	† 剥ぐ	712『古事記』
弾ける	† 弾く	状	1773『俳諧・新諧新選』	弾く	† 弾く	8C後『万葉集』

引ける	† 引く	状	1603-04『日葡辞書』	引く	† 引く	8C後『万葉集』
振れる	† 振る	状	1560『本福寺跡書』	振る	† 振る	720『日本書紀』
ほどける	† ほどく	離/状	1170『今鏡』	ほどく	† ほどく	8C後『万葉集』
掘れる	† 掘る	生/状	14C後『太平記』	掘る	† 掘る	712『古事記』
まくれる	† まくる	離/状	1661『仮名草子・むさしあぶみ』	まくる	† まくる	898-901『新撰字鏡』
めくれる	† めくる	離/状	1691『咄本・軽口露がはなし』	めくる	† めくる	1275『名語記』
もげる	† もぐ	離/状	室町末『御伽草子・磯崎』	もぐ	† もぐ	1178『長秋詠藻』
持てる	† 持つ	状	1603-04『日葡辞書』	持つ	† 持つ	712『古事記』
揉める	† 揉む	生/状	1677『評判記・もえくゐ』	揉む	† 揉む	720『日本書紀』
揺れる	† 揺る	状	1704-25『俳諧・元祿風韻』	揺る	† 揺る	1114『永久二年九月三井寺歌合』
よじれる	† よぢる	状	1667『評判記・吉原すずめ』	よじる	† よづ	8C後『万葉集』 ¹⁵
煮える	† 煮ゆ	生/状	1130『古本説話集』	煮る	† 煮る	712『古事記』

（離：離脱動詞類、生：動作の結果、対象が生まれる/眼前に現れる動詞類、状：状態変化動詞類）

動詞が多義である場合があるため、一つの動詞の意味が複数のカテゴリーに跨ることもあるが、凡そ「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」には「離脱動詞類」、「動作の結果、対象が生まれる／眼前に現れる動詞類」、そして「状態変化動詞類」が多く含まれていると考えられる。以下では、それぞれの分類について、いくつかの例を挙げながら詳しく見ていく。まず、(7)の表において分類を「離」としたものは、「物体が或る場所から離れる」という意味を持つ「離脱動詞」の類である。(8)は、NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所) において出現する、離脱動詞類の用例の一部である。

(8) 離脱動詞類：「物体が或る場所から離れる」意味を持つ動詞の類¹⁶。

- a. すでに2度目の接地はクラッシュで、前輪が折れ、左翼がもげていた。
(Yahoo!ブログ)
- b. たとえ肉が何斤か削げようとも、われわれは建国以来、最大のプロジェクトを完遂させる榮譽ある戦士なのだ。
(山崎豊子『大地の子』)
- c. 痒くて引っ掻いたのか、瘡蓋が半分千切れて、いまにも落ちそうにぶら下がっていた。
(井上ひさし/三浦哲郎『汚点：春は夜汽車の窓から』)
- d. その結果、軟骨から弾力性が失われてもろくなり、軟骨どうしの接触で表面が削れたり、ちょっとした衝撃で破壊されたりするようになります。
(井上肇監修・高山美治著『ひざのいたみをとる・なおす』)
- e. 石綿スレートはセメントでできているから、塗装が剥げたら水が浸透してしまう。
(武内孝雄『メイドイン・ニッポン物語』)
- f. 今、このテのリジット・タイプはとっても人気があるんです。入ってきてもスグに売れてしまいますよ。
(作者不詳『ちょっと古いハーレーに乗りたい』)
- g. 生糸はじめさまざまの荷は、たちまち、さばけた。京畿を中心に、日本国中に吸いこまれて行く。
(城山三郎『黄金の日々』)

例えば、(8a)の〈もげる〉という動詞では、本来「(飛行機の)機体」に付着していたと考えられる「左翼」が、「クラッシュ」によって、「機体」から離れてしまった状態を描写している。また、(8b)の〈削げる〉という動詞は、本来、自身の身に付着しているはずの「肉」が、離れ落ちてしまうという状態を表している。(8d)に挙げた〈削れる〉や(8e)に挙げた〈剥げる〉も、「骨の(表面)」や「塗装」が、もともと付着していたものから、離れることを表すため「離脱」の意味を担っていると解釈出来る。このように、これらの動詞は、概して「物体が或る場所から離れる」という意味を持っていると考えられる。また、〈売れる〉(= (8f))や〈さばける〉(= (8g))という動詞も、典型的な「離脱動詞類」とは異なるが、対象となるものが手元を離れて、目の前から無くなるという点において、「離脱動詞類」と類似した点を持つと考えられるだろう。

次いで、(7)の表において、分類を「生」としたものは、「動作の結果、対象が生まれるもしくは、眼前に現れる」といった意味を持つ動詞類である。(9)は、NINJAL-LWP for BCCWJ(国立国語研究所)において出現するこれらの自動詞の用例の一部である。

(9) 動作の結果、対象が生まれる／眼前に現れる動詞類

- a. ささっと掘れましたが中身はギサールの野菜とセリリティーサラダと蘇生靈根でした。
(Yahoo!ブログ)

- b. 浮きが勢い良く沈み、彼は竿を揚げた。ブラックバスがまた釣れた。
(塚本青史『水無月祓』)
- c. 今までの輪転機は新聞が四ページずつしか印刷でできなかったが、これだと機械を三台横につなげるだけで、二十四ページまで一気に刷れた。
(杉山隆男『メディアの興亡』)
- d. 陳寿の『三国志』は、魏、蜀、呉の三国の史書を合わせたもので、材料の選択が精密周到で、文章が簡潔でよく練れているが、叙述はかなり簡略である。
(方厚枢著／前野昭吉訳『中国出版史話』)
- e. ああ、それは、イカというもので、海から捕れたものだよ。
(及川征志郎『縄文の風』)

例えば、(9a) の〈掘れる〉という動詞では、「掘る」という動作の結果「ギザールの野菜とセリティーサラダと蘇生靈銀」が、眼前に現れることになったと解釈することが出来る。また、(9b) の〈釣れる〉という動詞では、動作主の「釣る」という動作の結果、「ブラックバス」が出現したと解釈することが出来る。更に (9c) の〈刷れる〉という動詞は、「刷る」という動作によって、「新聞」が生産されたと解釈することが出来る。これらの動詞は、対応する他動詞が示す動作によって、対象が生産される、もしくは眼前に出現するという事象を描写する動詞ということが出来るだろう。

続いて、(7) の表において、分類を「状」とした動詞は、「対象となる名詞句が元の状態から別の状態に変化する」ことを意味する「状態変化動詞」の類である。

(10) 状態変化動詞類

- a. つぎに薄いソースを可成りの量で加えて、ふたたび、じゃが芋が完全に煮えるまで、弱めの火でソース煮する。
(吉本隆明『背景の記憶』)
- b. 少し深めに掘れたところに三十〜四センチの高さからドス着地した瞬間腰が「ピキッ！」と来ました。
(Yahoo! ブログ)
- c. ひどく長い数秒が過ぎ、岩の削れる音がやんだ。
(福井晴敏『終戦のローレライ』)
- d. 欄干はその内剥げるかもね・・・。
(Yahoo! ブログ)

例えば、(10a) の〈煮える〉という動詞は、「煮る」という行為を行った結果、「じゃが芋」が柔らかい状態になるという、対象の状態変化を表している。また、前述したように「動作の結果、対象が生まれるもしくは、眼前に現れる」ことを表す動詞としての用法を持つ〈掘れる〉という動詞は、(10b) のように、何らかの要因によって、地面が窪んだ状態に変化するという状態変化動詞としての側面も持っていると考えられる。〈削れる〉や〈剥げる〉は、それぞれ (8d) (8e) のような「離脱動詞類」としての側面を持つ一方で、(10c) (10d) のように、「岩」が何らかの要因によって「削られた」

状態に変化する事象や「欄干」が「剥げた」状態に変化するという、「状態変化動詞類」としての側面も持つと考えられる。

ここまで、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」における、自動詞の意味に基いた分類について観察してきたが、これらの動詞群は総じて人為的要因、自然的要因など何かしらの外的な力を必要とする傾向があると考えられる。例えば、「離脱動詞類」に分類される〈もげる〉という動詞は、(8a)において、「クラッシュで」という原因を表す副詞句が共起しており、外的な力によって「左翼」が機体から離れた状態になったことが分かる。「左翼」が自らの性質によって、自然発生的に「もげた」状態になることは想定されにくい。また、(8b)に挙げた〈削げる〉という動詞も、対象となるものが自然発生的に「削げた」状態になることは考えにくい。〈売れる〉や〈さばける〉が表す事象に至っては必然的に「売る」「さばく」という行為が無ければ、成立することはない。

「動作の結果、対象が生まれる／眼前に現れる動詞類」に分類される、〈掘れる〉についても、(9a)で挙げたように、動作主の行為の結果、「ギザールの野菜とセレリティーサラダと蘇生霊銀」が「掘れた」状態になったのであって、「ギザールの野菜とセレリティーサラダと蘇生霊銀」の自らの性質によって、眼前に出現した訳ではない。また、(9b)の〈釣れる〉という動詞も、動作主の「釣る」という行為が必須であり、「ブラックバス」自らの性質によって「釣れた」状態になることは考えられない。

更に「状態変化動詞類」としての機能を担う、(10c)の〈削れる〉という動詞も、「岩」が自らの性質によって「削れた」状態になることは想定されにくく、何らかの外的な要因が関与することによって、初めて「削れる」という事象が成立すると考えられる。(10a)の〈煮える〉という動詞に至っては、「煮る」という行為を行う動作主がいなければ、対象が「煮えた」状態になることは不可能であろう。

このように、他動詞に対して遅れて生まれた自動詞は、総じて何らかの外的な要因、つまり外力の存在を前提としているものが多いと考えられる。

4. 2. 初出年代にそれほど差が見られないもの

前節では、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」の性質について観察した。本節では、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」について詳しく観察していくこととする。(11)は、『日本国語大辞典 精選版』の初出年代を比較した際に、一方が生まれてからもう一方が生まれるまでの期間が100年以内のもの、または自動詞と他動詞が上代において既に存在していたものである。表の網掛け部は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを表している。これらの動詞対について、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」と同様に、現代語の自動詞の意味から筆者の内省に基づいて、表の3列目(「分類」欄)のように、大まかに分類した。

(11) 初出年代にそれほど差が見られない自他對

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
えぐ 挟れる	† えぐ 挟る	状	1756『俳諧・江戸新八百韻』	えぐ 挟る	† えぐ 挟る	1703『浄瑠璃・曾根崎心中』
折れる	† 折る	状	720『日本書紀』	折る	† 折る	712『古事記』
切れる	† 切る	状	712『古事記』	切る	† 切る	720『日本書紀』
碎ける	† 碎く	状	8C後『万葉集』	碎く	† 碎く	8C後『万葉集』
くびれる	† くびる	状	720『日本書紀』	くびる	† くびる	720『日本書紀』
裂ける	† 裂く	状	712『古事記』	裂く	† 裂く	712『古事記』
知れる	† 知る	知	8C後『万葉集』	知る	† 知る	712『古事記』
溶ける	† 溶く	状	945『歌仙本貫之集』 ¹⁷	溶く	† 溶く	905-914『古今和歌集』 ¹⁸
解ける	† 解く	状	8C後『万葉集』 ¹⁹	解く	† 解く	712『古事記』 ²⁰
撮れる	† 撮る	生	1904《田口掬汀》 『女夫波』 ^{21 22}	撮る	† 撮る	1874《山口又市郎》『開化自慢』 ²³
開ける	† 開く	状	8C後『万葉集』	開く	† 開く	8C後『万葉集』
振れる	† 振る	状	1563『玉塵抄』	振る	† 振る	1603-04『日葡辞書』
焼ける	† 焼く	状	712『古事記』	焼く	† 焼く	712『古事記』
破ける	† 破く	状	1870-76《仮名垣魯文》 『西洋道中膝栗毛』	破く	† 破く	1802『洒落本・穴可至子』
破れる	† 破る	状	720『日本書紀』 ²⁴	破る	† 破る	720『日本書紀』 ²⁵
敗れる	† 敗る	状	720『日本書紀』 ²⁶	敗る	† 敗る	720『日本書紀』 ²⁷
割れる	† 割る	状	8C後『万葉集』	割る	† 割る	8C後『万葉集』
見える	† 見ゆ	知	712『古事記』	見る	† 見る	712『古事記』
聞こえる	† 聞こゆ	知	712『古事記』	聞く	† 聞く	712『古事記』

(状：状態変化動詞類、知：知覚動詞類、生：動作の結果、対象が生まれる/眼前に現れる動詞類)

(11) の表から分かるように、「初出年代にそれほど差が見られない自他對」には、「状態変化動詞類」や「知覚動詞類」が含まれており、「自動詞が遅れて生まれてくる自他對」に存在した、「離脱動詞類」や「動作の結果、対象が生まれる／眼前に現れる動

詞類」は基本的に見られない。以下、この動詞群に見られる「状態変化動詞類」と「知覚動詞類」について用例を確認しながら、詳しく見ていくこととする。

まず、(11)の表において、分類を「状」としたものは、前節で述べた、「対象となる名詞句が元の状態から別の状態に変化する」ことを表す「状態変化動詞」の類である。(12)は、NINJAL-LWP for BCCWJ（国立国語研究所）において出現する、これらの自動詞の用例の一部である。

(12) 状態変化動詞類

- a. 出掛けに、靴紐が切れてしまいました。

(小俣和美『あっ!!と驚く幸せのコツ』)

- b. ボロ谷は、文字通りに千仞の谷で、足下から鋭くえぐれた谷が、そのまま海にむかって落ちている。

(満坂太郎『海賊丸漂着異聞』)

- c. 東京は桜が咲き、富士山は雪が溶け山肌が見える。

(Yahoo!知恵袋)

- d. しかし、実際のところ、内臓が破裂し、あるいは、肋骨がバラバラに折れているというケースも珍しくないのだ。

(斎藤栄『二階堂警部最後の危機』)

- e. この考えでは、おそい拡大軸の下にはすでに厚さ4～5 kmのリソスフェアが存在し、しかもその上層2 kmぐらひは脆性的にふるまい、両側から引張られたリソスフェアはくびれて正断層群をつくり、中軸谷地形が生ずるとされるのである。

(上田誠也『プレート・テクトニクス』)

例えば、(12a)に挙げた〈切れる〉という動詞は、対象物である「靴紐」が元の状態から「切れた」状態に変化したことを表している。(12a)は対象物自体の変化を表す文として解釈することが出来る。(12b)の〈抉れる〉という動詞も、「(足元の)谷」がまさに「抉れた」状態になるという、対象物自体の状態が変化するという事象を表している。これらの動詞は、対象となる名詞句自体の状態が変化していることを表す動詞として解釈することが出来る。こうした「状態変化動詞類」は、{-e-}型自動詞と{-u}型他動詞の対における「初出年代に差が見られない自他対」の中で、大部分を占める動詞類である。

次いで、分類を「知」と記したものは、「ある対象や事象を感覚によって捉えるという意味」(『言語学大辞典 第6巻 術語編』)を持つ「知覚動詞」の類である。

(13) 知覚動詞類

- a. 飛鳥川沿いに北進すると、あちこちに松明の明かりが見えた。

(黒岩重吾『中大兄皇子伝』)

- b. 男の声が聞こえる。

(本沢みなみ『黒の狙撃手』)

c. 先生にそのことが知れたら、鉄拳制裁がふりかかる。

(波勝一広『スリランカで午後の紅茶を』)

例えば (13a) の〈見える〉という動詞は、対象である「明かり」が、視覚的に経験者に認識されたことを表している。また、(13b) の〈聞こえる〉という動詞は、「男の声」が聴覚的に経験者に認識されたことを表している。更に (13c) の〈知れる〉という動詞も「そのこと」という情報が、「先生」という経験者に認識されるということを表していると解釈される。これらの動詞は対象となる名詞句が経験者の感覚によって認識されることを表す動詞として位置づけることが出来る。「知覚動詞類」は、数は少ないものの、前節において観察した「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」には見られなかった動詞類である。

ここまで「初出年代に差が見られない自他対」について自動詞の意味毎に観察してきたが、この動詞群の大部分を占める、(12) のような「状態変化動詞類」が表す事象は、何らかの外的な要因によって起こることも想定出来る一方で、対象となるもの自らの性質によって成立することも想定することが出来ると考えられる。例えば、(12a) の〈切れる〉という動詞では、何らかの外的な力が加わったことによって「靴紐」が「切れる」という状態に変化したという解釈も可能だが、対象物である「靴紐」そのものが古くなったことによって「切れた」状態になったと解釈することも出来る。また、(12b) に示した〈決れる〉という動詞も、対象物である「谷」そのものの性質によって、「決れる」という状態に変化したと考えることが出来る。(12c) に挙げた〈溶ける〉という動詞も、通常「雪」は自らの性質によって「溶ける」という状態になることが出来るものであり、「何かが溶ける」という事象が成立するために、必ずしも「溶かす」という外的な行為や要因が想定されるものではないと考えられる。このように、「初出年代に差が見られない自他対」は、「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」に含まれる自動詞と比較した際に、事象が成立するために外力の存在を必ずしも必要とせず、対象自らの性質によって変化を起こすことが想定されやすい傾向があると考えられる。

なお、「知覚動詞類」は、対象となるもの自体が変化しているわけではないため、典型的な自他対応とは言い難い。従って、他の動詞類と比較した際に「知覚動詞類」は特殊な位置づけになると言わざるを得ない。〈見える〉(＝ (13a))、〈聞こえる〉(＝ (13b))、〈知れる〉(＝ (13c)) が表す事象は、それぞれ「明かり」「男の声」「そのこと」という対象そのものの性質によって、経験者に知覚されたと解釈することも出来るため、外的な作用を必ずしも必要としない自発的な事象として位置づけられる可能性もあるが、この点については今後の課題としておきたい。

4. 3. 他動詞が遅れて生まれてくる自他対

最後に「他動詞が遅れて生まれてくる自他対」について観察する。(14) は、『日本国語大辞典 精選版』の初出年代を比較した際に、他動詞が約100年以上遅れて生まれて

くる自他対である。表の網掛け部は現代語において自動詞と他動詞の対応が希薄と考えられるものを表している。これらの動詞対について「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」「初出年代にそれほど差が見られない自他対」と同様に、現代語の自動詞の意味から、筆者の内省に基づき、表の3列目（「分類」欄）のように、大まかに分類した。

(14) 他動詞が遅れて生まれてくる自他対

自動詞形				他動詞形		
口語形	文語形	分類	初出年代	口語形	文語形	初出年代
欠ける	† 欠く	離/状	720『日本書紀』	欠く	† 欠く	830『西大寺本 金光明最勝王 経平安初期点』
すぐれる	† すぐる	状	720『日本書紀』	すぐる	† すぐる	970-999『宇津 保物語』
^む 剥ける	† 剥く	離	11C中-13C『虫めづる 姫君』（『堤中納言物 語』）	^む 剥く	† 剥く	1212-15『古事 談』

（状：状態変化動詞類、離：離脱動詞類）

これらは、いわゆる逆成（back formation）による語と考えられ、「自動詞が遅れて生まれてくる自他対」や「初出年代にそれほど差が見られない自他対」に比べると、数は限られている。〈欠ける〉〈すぐれる〉はそれぞれ、「必要な部分が抜け落ちている」「良い状態である、他の物より抜きんでている」等といった、物事の性質や状態を表す語であり、他の {-e-} 型自動詞に比べて形容詞に近い意味合いを持つと考えられる。英語等でもこれらの語はそれぞれ、“absent”や“excellent”といった形容詞が対応すると考えられる。これらの語は経験的に自動詞形の意味がベースになっており、そのような状態にするという他動詞の形を後から半ば強制的に作り出したことが逆成（back formation）の要因になっているのではないかと推測する。

〈剥く〉*vs.* 〈剥ける〉は離脱動詞であり、他の動詞の派生に照らせば、自動詞が遅れて生まれることが想定されるが、『日本国語大辞典 精選版』での初出年代からは、他動詞が最大で200年程度遅れて生まれたことになる。もっとも文献の制約等の問題から、実際に語が生まれた時代と文献上の初出年代との間にずれがある場合も考えられるため、実際の語の派生の仕方と異なっていることも想定出来るが、ひとまず〈剥く〉*vs.* 〈剥ける〉の派生関係については本稿では例外としておきたい。

5. 結語

本稿では、日本語の自他対の中で、接辞 {-e-} を含む自動詞のペアを取り上げ、『日本国語大辞典 精選版』における初出年代をもとに、自他対の特質について大まかな分析を行った。

これらの自他対は、凡そ歴史的に自動詞が遅れて生まれたものと、初出年代にそれほど差が見られないものに分類することが出来る。例外はあるものの、前者には「離脱動詞類」や「動作の結果、対象が生まれるもしくは眼前に現れる動詞」が多く含まれるのに対して、後者は主に「状態変化動詞類」や「知覚動詞類」で構成されている。また、前者は典型的には自動詞が表す事象において、人為的な行為や何らかの外的な力が想定されるのに対して、後者は基本的に事象成立にそうしたものを必ずしも必要とせず、自然発生的、もしくは自然力、内力によって事象が成立することが出来ると解釈される。影山 (1996) において指摘されている「反使役」の意味を持つ、接辞 {-e-} を含む自動詞は、典型的には後者の動詞群に該当するものということが出来るだろう。また、いわゆる逆成 (back formation) によるものと考えられる「他動詞が遅れて生まれてくる自他対」については、物事の性質や状態といった形容詞的な意味を自動詞形が担っていることが要因として考えられる。

本稿での動詞の分類は筆者の内省に基づくものであり、何らかの客観的な基準に基づくものではない。動詞の文法的な性質を精密に記述するうえで何らかのテストによって動詞を分類する必要があると考える。{-e-} 型自動詞の派生パターンと文法的な振舞いを正確に分析するうえで、語義の変化も含めた動詞語彙の特徴を細かく分析し、一般化していく必要がある。

本稿で取り上げた {-e-} 型自動詞と {-u} 型他動詞の対は日本語の自他対の一部である。日本語の自他対の派生パターンと文法的振る舞いを包括的に分析するうえで、接辞 {-ar-} を含む自他対や、{r} と {s} の対立による自他対等、他の形式との関係について観察する必要があるが、これらの形式の検討については別稿を用意したい。

参考文献

- 青木博史 (1995), 「中世室町期に於ける四段動詞の下二段派生」『語文研究』79, pp. 37-49.
青木博史 (1996), 「可能動詞の成立について」『語文研究』81, pp. 45-56.
青木博史 (2001), 「四段対下二段の対応関係について」『京都府立大学学術報告 人文・社会』53, pp. 1-16.
石田春昭 (1958), 「動詞未然形の性格」『国文学』関西大学国文学会, 20, pp.44-58.
奥津敬一郎 (1967), 「自動化・他動化および両極化転形：自・他動詞の対応」『国語学』70, pp.46-66.
影山太郎 (1996), 『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版.
亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996), 『言語学大辞典 第六巻 術語編』三省堂.
須賀一好 (1980), 「併存する自動詞・他動詞の意味」『国語学』120, pp.31-41.
ナロックハイコ (2007a), 「日本語自他動詞対における有標差の動機付け」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』くろしお出版, pp.295-306.
ナロックハイコ (2007b), 「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」影山太郎編『レキシコンフォーラム(3)』ひつじ書房, pp.161-193.

- 西尾寅弥 (1954), 「動詞の派生について: 自他の対立の型による」『国語学』17, pp.105-117.
- 早津恵美子 (1987), 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』京都大学言語学研究会, 6, pp.79-109.
- FRELLSVIG, Bjarke/John WHITMAN (2016) The Historical Source of the Bigrade Transitivity Alternations in Japanese. In : KAGEYAMA, Taro/Wesley JACOBSEN (eds) *Valency Alternations in Japanese*. Berlin et al. : Mouton de Gruyter, pp.290-310.

用例・資料出典

- 北原保雄編 (2010), 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店.
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス・NINJAL LWP for BCCWJ』
- 小学館国語辞典編集部編 (2006), 『日本国語大辞典 精選版』小学館.
- ナロックハイコ・ブラシャントパルデシ・影山太郎・赤瀬川史朗 (2015), 『現代語自他対一覧表 Excel版』 (<http://watp.ninjal.ac.jp/resources/>)

付記

本稿は、筑波大学日本語日本文学会第41回大会 (2018年10月6日、於: 筑波大学) における口頭発表及び2018年12月に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した修士論文の一部 (第2章) に加筆・修正を加えたものである。本研究全般にわたり、この上ないご指導を賜った先生方、並びに発表に際し貴重な御教示を賜った方々に対し、ここに記して深く感謝申し上げる。

注

- 紙幅の都合上、それぞれのパターンの語例は代表的なもののみを挙げている。
- 影山 (1996) では、〈外れる〉vs. 〈外す〉のように、{-r-} と {-s-} の対応になっているものも「反使役化」として取り上げているが、これは〈破ける〉vs. 〈破く〉、〈取れる〉vs. 〈取る〉のような対応とは異なる形態的な形式である。本稿では、このような {-r-} と {-s-} の対応による形式のものは考察の対象から外すことにする。また、〈更ける〉vs. 〈更かす〉のような {-e-} 型と {-as-} 型の対応による形式 (= (1g)) も本稿では考察の対象から外す。
- 「初出年代にそれほど差が見られない自他対」には自動詞と他動詞の初出年代が共に上代であるものも含まれている。この場合、文献上遡れる時代以前に語が成立していた可能性もあるため、両者間に、必ずしも「初出年代に差が見られない」と言うことは出来ないが、本研究では自他対の分類の便宜上、ひとまず「初出年代にそれほど差が見られない自他対」という一つのカテゴリーに分類することにした。
- 基本的に一方が生まれてから、もう一方が生まれるまでに100年以上経過しているものを「自動詞が遅れて生まれてくるもの」「他動詞が遅れて生まれてくるもの」としている。
- 語が派生した当初の意味と現代語の意味が異なっている場合が考えられるが、本研究では基本的に『日本国語大辞典 精選版』に掲載されている最も古い用例を採用した。但し、〈破れる〉と〈敗れる〉のように、現代語において明らかに同音異義語と判断される語が同一の項目に立項されている場合は、筆者の内省に基づき、出来る限り現代語の意味に合致する語釈における用例の初出を採用した。
- ここでの初出の語釈は「一方に引かれて寄る。ひきつる。」である。
- ここでの初出の語釈は「上の物にかけてぶらさげる、つるす。」である。
- ここでの初出の語釈は「魚がとれる。」である。
- ここでの初出の語釈は「魚や虫などを釣り針や糸に引っかけて取る。」である。
- ここでの初出の語釈は「付いていたものが、そこから離れ落ちる。」である。
- ここでの初出の語釈は「手に持つ。つかむ。」である。
- ここでの初出の語釈は「収穫物が得られる。」である。
- ここでの初出の語釈は「逃げないようにしっかりと押える。つかまえる。捕獲する。」である。
- ここでの初出年代は母音語幹動詞 (上二段活用) 〈ねづ〉の初出年代である。現代語のような子音語幹動詞 (四/五段活用) の初出年代は1642『仮名草子・可笑記』となっている。

- 15 ここでの初出年代は母音語幹動詞（上二段活用）〈よづ〉の初出年代である。現代のような子音語幹動詞（四/五段活用）〈よじる〉の初出年代は1867『和英語林集成』（初版）となっている。なお、母音語幹動詞〈よづ〉には「あがろうとしてすがりつく。とりつく。すがる。また、すがりつくようにして木や山などに登る。よどる。」という自動詞の用法もあり、初出年代は810-824『靈異記』（『日本霊異記』）となっている。
- 16 自動詞の初出年代が遅れる自他對の中で、特に離脱動詞類には、他動詞文で存在していた外力を強く抑制する性質を持つものが見られる。例えば「脱げる」「もげる」という動詞において「脱げた靴」「もげたミカン」と言った場合、「靴」「ミカン」は非意図的に「脱げる」「もげる」という状態になったもののしか表さず、「脱いだ靴」「もいだミカン」と言った場合とは、明らかに異なるものである。一方で4.2節において詳しく見る、初出年代にそれほど差が見られない自他對については、こうした性質を持つ對は見られない。例えば「切れる」「割れる」という動詞において「切れた糸」「割れた石」と言った場合の「糸」「石」は自然発生的に（例えば年月が経過して劣化したことにより）「切れる」「割れる」という状態になったものが想定出来る一方で、誰かが「切る」「割る」という行為を行った結果生じたものという解釈も出来る。この場合「切った糸」「割った石」と同一のものという解釈が出来ることになる。「切れる」「割れる」等は、対象の内在的なコントロール（対象物自体の性質）による場合と外力を読み込んだ場合の双方が解釈出来るが、「脱げる」「もげる」等は、通常対象の内在的コントロールによるものは想定されず（例えば「靴」や「ミカン」が年月を経過し、劣化したことにより「脱げる」「もげる」という状態になること）、外力が必要となるが、自動詞文ではそれが構文上強く抑制されることになると推測される。
- 17 ここでの初出の語釈は「熱などが加わって、固体から液体になる。融解する。とろける。柔らかくなる。」である。
- 18 ここでの初出の語釈は「固形のをを熱などを加えて液状にする。融解する。とかす。とろかす。」である。
- 19 ここでの初出の語釈は「結ばれていたものがわかれ離れる。結び目がほどける。」である。
- 20 ここでの初出の語釈は「結んであるもの、縫ってあるものなどをほどく。」である。
- 21 〈撮る〉と〈撮れる〉の初出年代は100年離れていないため、(11)の表の動詞群に分類されるものであるが、近代における文献量を考慮すると、むしろ自動詞が遅れて生まれてくる動詞群と同じ振る舞いをしていると考えられる。
- 22 ここでの初出の語釈は「写真にうつる。」である。
- 23 ここでの初出の語釈は「写真にうつす。撮影する。」である。
- 24 ここでの初出の語釈は「身に傷を負う。傷つく。損なわれる。害される。」である。
- 25 ここでの初出の語釈は「からだに傷をつける。負傷させる。そこなう。害する。」である。
- 26 ここでの初出の語釈は「戦いや勝負事に負ける。敗北する。」である。
- 27 ここでの初出の語釈は「戦いや勝負事で相手を負かす。敗北させる。」である。

（せきぐち ゆうき 栃木県立大田原高等学校）